

## 私の昭和

香川芳子

女子栄養大学学長



「当時80歳の岸朝子さんと対談したときの写真です。子育てのときも料理記者としての仕事をすることも、いつもその根底には食べることをたいせつにするという精神がありました」撮影／川田雅章（『栄養と料理』2004年1月号）

## 昭和・平成と食を見続けた 岸朝子さんの死を惜しみます

9月、昭和40年代から50年代にかけて、『栄養と料理』の編集長として尽力された岸朝子さんが91歳でご逝去されました。ご冥福をお祈りいたします。岸さんは戦前の卒業生で、昭和43年、母・綾が岸さんの勤め先、主婦の友社に出向いて母校に戻るように説得したと聞きます。最後には社長に直談判したようですが、話が決まったときはたいそう喜んでいました。

核家族化や女性の社会進出により料理の簡便化が進み、お湯で温めるだけで食べられるレトルトのカレーが話題になった時期でした。岸さんは本誌を大判化して、一般のかたにも親しみやすい内容にしました。北海道から沖縄まで日本

各地の食を紹介するカメララボ「日本の食事」は5年ほど続きましたが、貴重な記録です。有名人の食事を紹介する「栄養診断」では、宮様や俳優、政治家、歌舞伎俳優などが誌面に登場します。「栄養と料理基本カード」を再開し、巻末に厚紙を挿入して切り取り式に。1年分が社会通信教育のテキストにもなりました。

学園退職後は編集プロダクションを立ち上げ、70歳でテレビにデビュー。テレビ番組「料理の鉄人」の審査員では美しい日本語「おいしゅうございます」で一躍有名になりました。戦後の経済発展の一方で変貌した、日本人の食の問題についても発言し続けました。